OUKA
Osaka University Knowledge Archive

Title	松野明久教授略歴および研究業績等一覧
Author(s)	
Citation	国際公共政策研究. 2022, 27(1), p. 19-30
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/89236
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

松野明久教授略歴および研究業績等一覧

松野明久教授は、1982 年 3 月に東京外国語大学大学院外国語学研究科アジア第三言語専攻（修士課程）を修了した。1983 年 4 月より大阪外国語大学外国語学部助手に採用され、1986 年 1 月同講師、1991 年 1 月同助教授を経て、2004 年 1 月同教授に昇任した。2007 年 10 月には、大阪外国語大学と大阪大学の統合の結果、大阪大学大学院国際公共政策研究科に配置換えとなり、2018 年に研究科長に就任して、大学院国際公共政策研究科の発展に尽力した。

この間、長年にわたりゼミ等での課外活動を含む熱心な学生教育に注力した。学術面では、当初は学部時代にインドネシア政府留学生として渡航したインドネシアの言語（特にインドネシア語及びバリ語文法）や文化を研究し、その後は研究対象を拡げた。具体的には、前世紀から今世紀への転換期にインドネシアとの紛争を経て主権回復（独立）を果たした東ティモールやインドネシアの他の地域における紛争、平和構築について、日本を代表する研究者の一人として、国内外の学界に多大な貢献をした。同人の代表作の一部の英文論考が、1975 年に東ティモールが宗主国ポルトガルから独立を宣言した直後にその東ティモールを併合したインドネシアの後ろ盾となり、東ティモール独立後もインドネシアの紛争に多大な関心を示してきたオーストラリアの大学出版局から刊行されていることは、そのことを如実に物語っている。広く国際政治分野における邦語の代表的辞典である猪口孝ほか編『国際政治事典』（弘文堂、2005 年）の「東ティモール独立」の項でも、同人の代表作の著書（単著）『東ティモール独立史』が、主要文献として唯一挙げられている。なお、同人は 1999 年 6 月から 3 か月間、国際連合・東ティモール派遣団職員（地方選挙管理官）として、また 2003 年 4 月から 1 年間、東ティモール受容真実和解委員会に歴史調査アドバイザーとして、さらに 2007 年 7 月から同年末にかけて、東ティモール政府・社会連帯省に断続的に国際協力機構（JICA）短期専門家として派遣された。そうした実務経験、とりわけ 1999 年 8 月 30 日の住民投票の前後、紛争下のきわめて過酷な環境（いわゆるＰＫＯ五原則を満たさず、自衛隊の派遣ができず、日本の活動は外交や域外難民支援に止まった）に身を置いた体験に裏打ちされた同人の議論は、余人を持って代えがたい説得力を持ったものと思われる。その他、西パプアの自治問題やスマトラ沖地震とそれに伴う津波（2004 年）で甚大な被害を受けた紛争下のアチェにおける救援活動、また近年はタイやフィリピンといったインドネシア以外の東南アジア諸国や西サハラや北アイルランド等、東南アジア以外の地域にも研究対象を拡大して、地域紛争とその後の平和構築の研究に邁進してきた。加えてオランダからの独立後、アジア・アフリカ会議（バンドン会議）（1955 年）の開催地となり、戦後、脱植民地化の過程にあった第三世界を先導したインドネシアから共産主義を一掃した 9・30 事件（1965 年）――近年、広く冷戦下の東南アジアを含む東アジアの国際政治史の大きな転換点であったとも見なされている――のバリ島における事件の展開を論じた代表作の一つの英文論考、女性史に連なる業績等、その関心領域はきわめて幅広い。

インドネシア語や英語を筆頭にその他の国や地域の言語にも非常に堪能で、ヤン・デ・ホント、メンノ・フィツキ『A Narrow Bridge（一本の細い橋）――美術でひもとくオランダと日本の交流史』をはじめとして、いくつかの訳書を手掛けているのも、同人の重要な学術的貢献である。また専門分野における緻密な研究を基礎に、ＮＨＫ等の報道番組への出演や協力、諸全国紙での解説・論説や『国際問題』、『世界』や『現代思想』といった総合誌や一般誌への寄稿も活発に行ってきた。

学内運営の面でも大学院国際公共政策研究科において広報委員会等、各種委員会の委員長、また副研究科長、評議員、そして既述のとおり研究科長として、とりわけ国際的な学術交流や学生交流に尽

力した。インドネシアの元宗主国オランダの名門ライデン大学における長期（2 年間）の在外研究を踏まえて、適塾記念センター・オランダ学研究部門の教授も兼任した。そうした経緯から大学院国際公共政策研究科とグローニンゲン（フローニンゲン）大学（オランダ）、さらにはデ・ラ・サール大学（フィリピン）とのダブルディグリー・プログラムの開設に力を尽くし、また特殊講義（Gateway to Europe）（大学院国際公共政策研究科博士前期課程）、特別講義（Gateway to Europe）（法学部国際公共政策学科）の開講も、同人の力行なくして決して実現されなかったはずである。

以上のように松野教授は、多くの留学生を含め学生に対する親身の指導、精力的な専門分野の研究や学術交流、積極的な社会貢献、また地道な学内運営に尽くしたものであり、ここに、大阪大学国際公共政策学会はその功績をたたえ深く感謝の意を表する。

主要著書

1.『東ティモール独立史』早稲田大学出版部、2002 年。
2.『ナクロマ―東ティモール民族独立小史』（古沢希代子との共著）日本評論社、1993 年。
3.『インドネシアのポピュラー・カルチャー』（編著）めこん、1995 年。
4.『トラウマ的記憶の社会史』（大阪外国語大学グローバル・ダイアログ研究会との共編著）明石書店、2007 年。
5. ヤン・デ・ホント、メンノ・フィツキ（菅原由美との共訳））『A Narrow Bridge（一本の細い橋）－美術でひもとくオランダと日本の交流史』大阪大学出版会、2020 年。

他 7 冊（訳書を含む）

主要学術論文

1. “The UN Transitional Administration and Democracy Building in Timor-Leste”, in David Mearn (ed.), *Democratic Governance in Timor-Leste: Reconciling the Local and the National*, Charles Darwin University Press, 2008, pp. 52-70.
2. “West Papua and the changing nature of self-determination”, in Peter King, Jim Elmslie and Camellia Webb-Gannon (eds.), *Comprehending West Papua*, Centre for Peace and Conflict Studies, University of Sydney, 2011, pp. 177-190.
3. “The 30 September Movement and its Aftermath in Bali, October-December 1965”, in Katherine McGregor, Jess Melvin, Annie Pohlman (eds.), *The Indonesian Genocide of 1965: Causes, Dynamics and Legacies*, Palgrave Macmillan, 2018, pp. 71-88.

他 29 編

松野明久教授研究業績等一覧

＊発表年順（古い順）に記載。著者・編者記載なき場合は、本人単著・編集。

本（単著）

2002　『東ティモール独立史』早稲田大学出版部。

本（共著・編著）

1993　古沢希代子・松野明久『ナクロマ–東ティモール民族独立小史』日本評論社。
1995　（編）『インドネシアのポピュラー・カルチャー』めこん。
2007　大阪外国語大学グローバル・ダイアログ研究会・松野明久（編）『トラウマ的記憶の社会史』明石書店。
2012　松野明久・中川理（編）『フード・セキュリティと紛争』大阪大学グローバルコラボレーションセンター。

翻訳・編訳・監訳

1982　（翻訳）ミスバッハ・ユサ・ビラン著「インドネシア映画小史」佐藤忠男（編著）『映画が王様の国』に所収、話の特集社、171–210 頁。
1990　（編訳）『インドネシアの昔話』偕成社。
1992　（翻訳）『森の少女 ブーラン＝クニン』文渓堂（てのひら文庫）。
1992　（翻訳）S・ルキア、ウトゥイ・タタン・ソンタニ著『孤独な愛の風景–1950 年代のインドネシア文学から』現代企画室。
1996　（監訳）D.R. ハリス（編）『インドネシア労働レポート　検証・経済成長と労働者』日本評論社。
2013　（部分監修）津田守（編）『15 言語の裁判員裁判用語と解説 第 2 巻』現代人文社。インドネシア語部分（122–166 頁）を監修。
2020　（翻訳）ヤン・デ・ホント、メンノ・フィツキ著、菅原由美・松野明久（翻訳）『A Narrow Bridge（一本の細い橋）–美術でひもとくオランダと日本の交流史』大阪大学出版会。

本（章分担）、論文

1981　「削歯考—バリ島における削歯の解釈をめぐって」東京外国語大学インドネシア語研究室（編）『伊東・渋沢両教授退官記念論文集』、133–142 頁。
1984　「インドネシア語の常用色名」『大阪外国語大学視聴覚外国語研究』7 号、43–54 頁。
1984　「インドネシア語の前置詞 UNTUK の“untuk+動詞”における願望標示機能について」『大阪外国語大学学報』第 64 号、219–227 頁。
1985　「続・インドネシア語の前置詞 UNTUK の“untuk+動詞”における願望標示機能について」『大阪外国語大学学報』第 66 号、39–50 頁。
1985　「インドネシア語における移動の終点と前置詞 di/ke」『大阪外国語大学学報』第 70–1 号、31–40 頁。

1986 「書かれたものと演じられたもの–バリの宗教舞踊劇チャロナランについて」『世界口承文芸研究』大阪外国語大学口承文芸研究会、83–99 頁。
1987 「マレー語」大野徹（編）『東南アジア大陸の言語』大学書林、232–233 頁。
1990 「テーマ・レーマとインドネシア語における受動の問題」『大阪外国語大学論集』No. 3、35–53 頁。
1993 「第 6 章　東ティモールと現代インドネシアのイデオロギー」西順蔵・小島晋治（編）『増補　アジアの差別問題』明石書店、338–368 頁。
1995 「インドネシア映画の物語世界」松野明久（編）『インドネシアのポピュラー・カルチャー』めこん、83–103 頁。
1995 「コマ劇団の笑えない風刺」松野明久（編）『インドネシアのポピュラー・カルチャー』めこん、133–140 頁。
1995 「西パプア–インドネシア化に抗するパプア民族主義」上村英明・大塚和義・萱野茂他（編）『アジアの先住民族』解放出版社、146–166 頁。
1998 “The Balibo Declaration: Between Text and Fact”, in Pedro Pinto Leite (ed.), *The East Timor Problem and the Role of Europe*, International Platform of Jurists for East Timor, pp. 159-194.
1998 “Reading the Unwritten: An Anatomy of Indonesian Discourse on East Timor”, in Pedro Pinto Leite (ed.), *The East Timor Problem and the Role of Europe*, International Platform of Jurists for East Timor, pp. 195-210.
2000 「第 5 章　インドネシア–通貨危機の中、国民はいかに政権を見限ったか」西口章雄・朴一（編）『転換期のアジア経済を学ぶ人のために』世界思想社、131–153 頁。
2006 「淫らで残忍な女たち–インドネシア新秩序の反ゲルワニ・プロパガンダ」大阪外国語大学グローバル・ダイアログ研究会［代表・武田佐知子］（編）『痛みと怒り–圧政を生き抜いた女性のオーラル・ヒストリー』明石書店、97–116 頁。
2006 「第 5 章 ポルトガルでもインドネシアでもなく」「第 6 章 独立前夜の混乱」「第 12 章 すべてを明るみに出せるか」「第 40 章 軽んじ見られた公用語」山田満（編）『東ティモールを知るための 50 章』明石書店、35–39 頁、40–44 頁、245–249 頁。
2007 「平和構築における真実探求–紛争後の東ティモールの事例から」城山英明・石田勇治・遠藤乾（編）『国際刑事司法の役割と課題 : 紛争現場からの平和構築』東信堂、92–108 頁。
2007 「敗北させられた女たちに捧げるレクイエム–アユ・ウタミの『ラルン』を読む」『えくす・おりえんて』（大阪外国語大学言語社会学会学会誌）No. 14、pp. 61–80。
2008 “The UN Transitional Administration and Democracy Building in Timor-Leste”, in David Mearn (ed.), *Democratic Governance in Timor-Leste: Reconciling the Local and the National,* Charles Darwin University Press, pp. 52-70.
2009 “Stability and Democracy in Post-Conflict East Timor”, in Herbert Wulf (ed.), *Still Under Construction: Regional Organisations' Capacities for Conflict Prevention*, INEF Report No. 97*,* Institute for Development and Peace, Universität Duisburg-Essen, pp. 40-54.
2010 「西パプア–国際関係の中で揺らぐ自決権の行使」『PRIME』No. 32、明治学院大学国際平和研究所、pp. 29–44。
2010 “Analysing Timor-Leste Electoral Politics from a Socio-Economic Perspective”, Timor-Leste Studies Association (ed.), *Understanding Timor-Leste,* pp. 330-334.

2011　“West Papua and the changing nature of self-determination”, in Peter King, Jim Elmslie and Camellia Webb-Gannon (eds.), *Comprehending West Papua*, Centre for Peace and Conflict Studies, University of Sydney, pp. 177-190.

2012　「連戦連敗の移行期正義−インドネシアと東ティモールにおける責任追及の軌跡　1998〜2010 年」日本平和学会編『平和研究　体制以降期の人権回復と正義』第 38 号、pp. 77−95。

2012　「東ティモールにおける紛争とフード・セキュリティ：植民地化、紛争、グロバーリゼーションと食糧問題」松野明久・中川理（編）『フード・セキュリティと紛争』大阪大学グローバルコラボレーションセンター、263−78 頁。

2013　「地域紛争とインドネシア共和国史」『ワセダアジアレビュー』No. 14、早稲田大学地域・地域間研究機構、pp. 54−59。

2014　「インドネシア・東ティモールの市民社会」秦辰也編『アジアの市民社会と NGO』晃洋書房、175−198 頁。

2014　“Construção da Democracia, diálogo político e capital social na transição de Timor-Leste para a independência”, *Revista Critica de Ciências Sociais* 104, Coimbra University, pp. 83-100.

2016　「第 4 章　現代的紛争の分析と解決」星野俊也・大槻恒裕・村上正直（編）『グローバリズムと公共政策の責任　第 1 巻：平和の共有と公共政策』大阪大学出版会、79−105 頁。

2018　「インドネシアの排外主義 : 政治的な策謀がもたらす国民統合の危機」大阪大学未来戦略機構第 5 部門未来共生イノベーター博士課程プログラム（編）『未来共生学』第 5 巻、105−113 頁。

2018　“The 30 September Movement and its Aftermath in Bali, October-December 1965”, in Katherine McGregor, Jess Melvin, Annie Pohlman (eds.), *The Indonesian Genocide of 1965: Causes, Dynamics and Legacies*, Palgrave Macmillan, 2018, pp. 71-88.

2020　「第 8 章　東南アジア島嶼部周縁地域における日本軍性奴隷制　東ティモールとインドネシア・南スラウェシ州の調査から」纐纈厚・朴容九編『時効なき日本軍「慰安婦」問題を問う』社会評論社、251−289 頁。

2021　“The Decline of Freedom of Expression in Japan – Political Interference and Blackmail”, in Maria Ochwat (ed.), *Human Rights in Asia: selected issues*, Turon: Adam Marszalek Publishing House (Poland), 2021, pp. 228-256.

書評

1994　「Unders Uhlin, I*ndonesia and the Third Wave of Democratization: Indonesian Pro-Democracy Movement in a Changing World*, Routledge, 1997.」『アジア経済』Vol. 40, No. 4、1994 年 4 月、75−78 頁。

解説・論説・記事（主なもの）

1992　『東ティモール・サンタクルス虐殺 事件とその波紋』大阪東ティモール協会刊。

1993　「東ティモール占領 18 年 解放阻む非民主性、インドネシアの思想的病理、内なる幻想言語支配」『読売新聞』1993 年 10 月 7 日［大阪版］夕刊。

1994　「インドネシアの国家保安法と治安維持体制」『法学セミナー』No. 473、1994 年 5 月号、

（特別企画 逆行するアジア 問われる国家治安法）60-63頁。
1994 「対談 アジアの人権に未来はあるか-朴元淳＋松野明久」『法学セミナー』No. 474、1994年6月号、50-57頁。
1994 「インドネシア 米国の制裁を恐れず体制維持を図る 労働基本権は国際基準に達していないが」『世界週報』1994年10月25日号、26-29頁。
1995 「インドネシア＝人権抑圧を照射する東ティモール問題」『エコノミスト臨時増刊 2.13 '95国際経済・政治事典「世界を読む」』毎日新聞社、34-35頁。
1996 「インドネシア暴動 スハルト政権の“最後”を暗示した『灰色の土曜日』事件」『エコノミスト』1996年9月10日号、70-73頁。
1997 「東ティモール-小さな民族の生き残りをかけた闘い」『労働経済旬報』No. 1580、1997年3月下旬号、30-34頁。
1997 「国連人権委員会における東ティモール」『マスコミ市民』No. 343、1997年6月号、75-79頁。
1998 「インドネシアの金融危機対策はなぜ混乱したか」『労働経済旬報』No. 1604、1998年3月下旬号、4-7頁。
1998 「スハルト“温存”の爆弾を抱えたハビビ新政権のあやうさ」『エコノミスト』1998年6月16日号、77-79頁。
1999 「東ティモール侵略-それは如何に始まったか、をめぐる二つの回顧」『労働経済旬報』No. 1626、1999年2月下旬号、労働経済社、4-7頁。
2000 「東ティモール住民投票～忘れえぬ人びと」『青淵』613号（平成12年4月号）、渋沢青淵記念財団竜門社、32-34頁。
2000 「特別リポート 東チモール、独立へ」『ブリタニカ国際年鑑 2000』平凡社、2000年、398-401頁。
2002 「東ティモール大統領と内閣の対立」『世界』No. 702、2002年6月号、25-28頁。
2002 「終わらぬ東ティモール紛争 インドネシアの『敗北』と『反省』」朝日新聞、2002年6月24日。
2002 「東ティモールの文化-伝統文化を中心に」『ユネスコアジア文化ニュース』335号、2001年12月15日、2-3頁。
2003 「東ティモール 紛争後を考える 上・下」西日本新聞、2003年2月20日、2月21日。
2003 「東ティモールにおけるポスト・コンフリクトの課題」『国際問題』No. 520、2003年7月、55-71頁。
2004 「公的セクターの汚職について～国軍、司法、公共サービス～」『インドネシア・ニュースレター』No. 50、2004年11月、30-36頁。
2005 「アチェ～紛争地における災害と救援活動」『インドネシア・ニュースレター』No. 51、2005年2月、34-40頁。
2005 「地震と津波 アチェ報告・バンダアチェ市の被災地を訪問して」『インドネシア・ニュースレター』No. 52、2005年4月、2-10頁。
2005 「アチェ-女性の被害状況をもっと知ろう」『女たちの21世紀［特集］災害とジェンダー』No. 42、アジア女性資料センター刊、2005年5月、16-19頁。
2005 「東ティモール紛争後の現場から：東ティモール受容真実和解委員会の仕事」（財）アジ

ア・太平洋人権情報センター『アジア・太平洋人権レビュー 2005』、現代人文社、2005 年 6 月、67-79 頁。

2006　「パプア 自由選択行為の見直し～ドローフレーフェル報告書の波紋」『インドネシア・ニュースレター』No. 55、2006 年 2 月、6-12 頁。

2006　「JANNI アチェ支援活動報告 2005.4-2006.5」『インドネシア・ニュースレター』No. 56、2006 年 5 月、32-48 頁。

2006　「中部ジャワ地震～クラテン県の NGO を訪ねて～」『インドネシア・ニュースレター』No. 58、2006 年 10 月、22-28 頁。

2008　「東ティモール」桃木至朗他（編）『東南アジアを知る事典』平凡社、2008 年、639-640 頁。

2008　「9・30 事件、推論の妙味-真相をめぐる議論の新展開」『インドネシア・ニュースレター』No. 62、日本インドネシア NGO ネットワーク、2008 年 1 月、43-52 頁。

2008　「アチェ～撤退の準備に入る復興支援と残された課題～」『インドネシア・ニュースレター』No. 63、2008 年 5 月、41-47 頁。

2009　「EPA による看護師・介護士候補者来日のインパクト」『インドネシア・ニュースレター』No. 67、2009 年 4 月、2-15 頁。

2010　「インドネシアの人権～国際的コミットメントと国内の状況～」『インドネシア・ニュースレター』No. 71、2010 年 3 月、2-33 頁。

2010　「東ティモール-グローバル化時代の国民国家建設」『季刊 民族学』No. 132、2010 年 4 月、4-7 頁。

2010　「求められる政策の整合生と持続可能性」『月刊インドネシア　看護師・介護福祉士問題特集』No. 746、2010 年 4 月、4-7 頁。

2010　「パプア問題～特別自治を『返上』する住民～」『インドネシア・ニュースレター』No. 72、2010 年 7 月、51-55 頁。

2011　「東ティモールの独立問題」和田春樹他（編）『東アジア近現代通史（9）経済発展と民主革命』岩波書店、382 頁。

2011　「西パプア拷問ビデオ事件」『人権キーワード 2011（部落解放 2011:646 増刊号）』解放出版社、14-17 頁。

2012　「パプアの自決権と人権回復の闘い～現状と展望～」『インドネシア・ニュースレター』No. 79、2012 年 5 月、19-30 頁。

2013　「9・30 事件とその後の虐殺 真相究明と被害者救済」村井吉敬・佐伯奈津子・間瀬朋子（編）『現代インドネシアを知るための 60 章』明石書店、187-190 頁。

2013　「インドネシアの食料　キャッサバ物語」『インドネシア・ニュースレター』No. 83、2013 年 8 月、41-47 頁。

2013　「ドキュメンタリー映画評 The Act of Killing（ジョシュア・オッペンハイマー監督作品、2012 年）　堂々と見せられる『毒』～われわれは目を背けてはいけない」『インドネシア・ニュースレター』No. 84、2013 年 12 月、12-16 頁。

2013　「東ティモールの新聞、雑誌、官報及び出版物等の状況」東南アジア逐次刊行物プロジェクト（編）『東南アジア逐次刊行物の現在-収集・活用のためのガイドブック』、119-128 頁。

2013　「新蘭学事始-今、オランダに学ぶこと」『適塾』No. 46、適塾記念会、2013 年 12 月、65-70 頁。

2014 「民族集団に独立の権利はあるのか：自決・分離と冷戦後の国際関係」Asia Peacebuilding Initiative (Online)、2014 年 1 月。

2014 “Ethnic Groups’ Right to Independence: Self-determination, Secession and the Post-Cold War International Relations”, Asia Peacebuilding Initiative (Online), January 2014.

2015 「9・30 事件の謎を考える～第 87 回 JANNI 連続講座の話から～」『インドネシア・ニュースレター』No. 90、2015 年 12 月、14-24 頁。

2016 「50 年の時をへて甦る『黙らされし者』たちの歌」『インドネシア・ニュースレター』No. 93、2016 年 8 月、51-56 頁。

2017 「タイ深南部紛争における内／外ダイナミックスとその和平へのインプリケーション」Asia Peacebuilding Initiative (Online)、2017 年 2 月。

2017 「北アイルランド和平プロセスの今–パワーシェアリングの機能不全と埋まらない溝」Asia Peacebuilding Initiative (Online)、2017 年 4 月。

2017 「『表現の自由』と自決権の主張～西パプア問題の新たなフロントライン～」『インドネシア・ニュースレター』No. 95、2017 年 9 月、47-54 頁。

2018 「西サハラ：『行き詰まり』の構図と打開への展望」Asia Peacebuilding Initiative (Online)、2018 年 2 月。

2018 「ナクバのメモリサイド–風景と記憶の政治学」『現代思想（特集 イスラエル・パレスチナ問題）』No. 46、No. 8、2018 年 4 月、105-113 頁。

2018 「新秩序の過去に向き合う～総括なき『改革』からバックラッシュへ～」『インドネシア・ニュースレター』No. 97、2018 年 4 月、25-32 頁。

2019 「西サハラ独立問題の歴史と展望」『世界』No. 924、2019 年 9 月号、206-213 頁。

2020 「フィリピン政府と共産党の和平交渉–長期化の背景をさぐる」『世界』No. 939、2020 年 12 月号、199-205 頁。

2021 「西サハラの主権問題–トランプ外交の負の遺産」『世界』No. 942、2021 年 3 月号、27-30 頁。

報道関係（出演・取材・インタビュー・協力他）

1999 NHK ETV 特集「独立に揺れる島 東ティモール」5 月、出演。

1999 NHK BS ニュース「東ティモールの住民投票」8 月、現地から生出演。

1999 テレビ朝日ニュースステーション「東ティモール特集（報告）」9 月、出演。

1999 テレビ朝日ニュースステーション「東ティモール特集（対談）」9 月（または 10 月）、出演。

1999 テレビ朝日ニュースステーション「特集 変わり果てた東ティモール」11 月、現地取材及び出演。

2000 NHK ボランティアまっぷ「2000 年国際ボランティアの現場から」1 月 6 日、出演。

2000 NHK クローズアップ現代「和解は可能か～東ティモールの苦悩」8 月 30 日、出演。

2000 NHK スペシャル「東ティモール“暗黒の 9 月”の記録～アグスが遺したビデオテープ」11 月 25 日放送、協力。

2002 NHK BS23 ワールドニュース「東ティモール独立への課題」 4 月、出演。

2002 NHK 視点論点「東ティモール独立の課題」4 月、出演。

2002 NHK 視点論点「東ティモール独立後の展望」6 月、出演。
2006 NHK 視点論点「混迷深める東ティモール」6 月、出演。
2008 NHK 国際部ラジオ放送「What's Up Japan　非常事態東ティモール」2 月、インタビュー。
2009 NHK World, Asia 7 Days, In Depth: East Timor – A Decade of Independence, May 2009、出演。
2011 "A worm inside the new Indonesia", by Hamish McDonald, *Sydney Morning Herald*, February 26, 論文についての報道。
2011 NHK World, Asia 7 Days, Education: East Timor's Language Barrier, May 2011、出演。
2011 朝日ニュースター・ニュースの深層「インドネシアの光と影：パプアの人権侵害」12 月、出演。
2012 NHK World, Asia 7 Days, East Timor: Slow Progress, May 2012、出演。
2019 「（論説委員が聞く）東ティモール住民投票から 20 年 独立決めた強い民意」『中日新聞』『東京新聞』2019 年 6 月 22 日刊、インタビュー。